

慶應義塾における派遣留学

慶應義塾大学国際センター所長

慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター所長 友岡 賛

Susumu Tomooka

はじめに — 派遣留学のジェンダー問題

実は本誌の編集担当の方からいただいた当初の依頼は「派遣留学におけるジェンダー格差、あるいは男子学生の派遣留学の促進といったテーマで」というものだった。「どうしてジェンダー格差？」と思ったら、僕の前々々任者のS教授がかつてどこかで「慶應では派遣留学の促進に取り組んでいるが、女子学生の応募は多いのに、男子学生が少なく、それがネックになっている」といった話をしたらしく、その話を憶えていた或る方がこのようなテーマを提案されたとのことだった。この男女差の存在は以前から何となく感じてはいたものの、ちゃんと考えたことも、ちゃんと認識したこともなかったので、この機会に数字を確認してみることにした。

というわけで、かなりざっくりとだが、最近の2010年度のデータで計算してみると、派遣留学の学内選考の合格者（辞退者等を除く）について男女比較をしてみた場合、男子学生は在学生の約338人に一人が派遣留学生となっているのに対して、女子学生は約125人に一人ということで、実に男子学生の約2.7倍となっている。また、派遣留学の志願者について比較してみた場合には男子学生の約229人に一人に対して、女子学生は約84人に一人ということで、これも男子学生の約2.7倍となっており、したがって、合格率には差がないということになるが、志願者数、合格者数のどちらをみても男女差は歴然としている。

ただし、この大きな差はどこから来ているのか、についてはいくつかの理由を挙げることもできようが、どれも推測の域を出るものではなく、また、叙上のように、そもそも男女差の問題はこれを「ちゃんと考えたことも、ちゃんと認識したこともなかった」僕が急に「男子学生の派遣留学の促進といったテーマで」書けるはずもない。

というわけで、まずは「慶應義塾における派遣留学」という当たり障りのないタイトルで書くことにしたが、どうかお恕しいいただきたい。

慶應義塾における国際交流

慶應義塾における国際交流はその源を辿ればこの義塾の創立時にまで遡ることが

できよう。そもそも慶應義塾は、封建制度や鎖国政策などによって欧米諸国に大きく後れをとった日本が近代国家としての独立を果たすには、欧米諸国の文明に通じた、近代化の担い手たりうる人を育てることこそが肝要、との認識をもって創られた学塾であって、そうしたこの義塾はその起こりから海外に目を向けていたといえようし、また、創立者福澤諭吉は当時としては極めて異例ともいえる三度の洋行を果たし、その見聞を活かした種々の活動をもって日本の近代化に大きく寄与している。

したがって、慶應義塾の歴史には随所に国際交流の足跡が認められ、しかも、そのなかには日本においては先駆的なものも少なくない。例としては外国人教員の任用や教員の海外留学派遣、また、学生交流においても、まずは留学生の受け入れを挙げることができる。周知の通り、2008年に政府が「留学生30万人計画」を発表したのを契機に、昨今、さまざまな推進策が検討されている留学生の受け入れだが、日本の高等教育機関におけるその嚆矢は1881年、この義塾における朝鮮人留学生の受け入れだった。そうした慶應義塾はまた、実に50年近くも前の1964年に、これも日本の大学にあっては先駆的に、国際交流にかかわる諸業務を統一的に所管する機関、すなわち国際センターを設立、本稿で取り上げる派遣留学も、爾来、同センターが担当している。

派遣留学の概要

海外に留学している慶應義塾の学生は、実は意外に少なく、年間200名程度でしかないが、その大半は学生交換プログラムによる留学、すなわち交換留学の派遣生である。現在、この義塾は世界中の約250校の大学等と協定を結んでおり、国際センターはそのうちの100校以上と全学的な学生交換プログラムを実施している。ちなみに、この手のプログラムは、国際センターの「年表」によれば、まずは1966年にアメリカのウィンスロップ女子大学との間に開始されているが、これは数年間のみおこなわれ、したがって、現在に続くものとしては1972年に開始されたウエスタン・ミシガン大学とのプログラムが最古参で、これに1975年に開始のジョージタウン大学、そしてメリーランド大学とのプログラムが続く。現在の相手校は、数としては欧州、北米の大学等が多いが、その他、韓国はいうまでもなく、近年、経済的な躍進が著しい中国、そして東南アジアの大学等との交流も増加をみ、オセアニアのトップ大学とも交流協定を持つにいたっている。また、南米には、数は少ないものの、交流校があるが、アフリカには、包括協定を結んだ大学が一つあるものの、学生交流の実施にまでいたる協定相手はまだない。なお、最近の傾向としては、まずは欧米の大学等において生じた中東との交流熱が日本にも伝播し、日本の諸大学もこの地域に注目しつつあるが、慶應義塾の場合、全学的な学生交換の相手はまだ持っていない。

若者の内向き志向、留学希望者の伸び悩みが云々されるなか、しかし、交換留学の志望者は決して少なくなく、いつもかなりの狭き門といえる。選考（書類審査・面接審査）に際しては、慶應義塾の派遣、ということから、「この義塾として恥ずかしくない学生を」という観点がまずは重視されようが、他方、例えば「こういう学生にこそ、こういう経験を与えたい」といった教育的配慮も見受けられる。

いくつかの問題点

◇偏在 直上に述べたことに関して、ここで急に男女差の話に戻るが、選考担当者としての個人的な経験によれば、「恥ずかしくない学生を」という観点からは女子学生が選ばれやすいような気がするし、また、これは必ずしも男女差とは限らないが、留学経験や留学への関心度にはかなりの「偏在」が認められる。留学に関心のある学生は、交換留学プログラムに限らず、さまざまな海外プログラムの類いに参加した経験を持ち、また、これからも積極的に参加しようとしているが、他方、そうしたことに関心のない学生は全く関心がない。僕のゼミの学生のなかにも、ゼミの先生が国際センターの所長をやっている、という話を聞いても、「国際センターって何ですか？」といった感じの学生が特に男子に少なくない。叙上の「恥ずかしくない学生を」という観点からの選考も、経験豊かで積極的な人が選ばれ、選ばれる人はいつも選ばれる、という意味で「偏在」につながる。いずれにしても、男女差の問題は今回の原稿依頼を契機にこれからちゃんと考えてみたい。

◇質 一般に派遣留学の促進ということについていえば、促進というものは、むしろ、普通は「数」の問題として捉えられようが、他方、量より質ということも看過できない。ここ何年かの間、慶應義塾は国際連携の推進について、まずは量的な面に目を向け、例えば交換協定の数や留學生の数を増やすことに努めてきた。むしろ、これまでも質的な面が疎かにされてきたというわけではないが、近頃は、質の向上にこそ力を注ぐべき時期かもしれない、と考えている。派遣留学の質についてまずなすべきことは相手校の吟味、相手校との関係のあり方の吟味である。

◇就活 周知の通り、留学の主な障害の一つは就職活動である。これは交換留学に限ったことではないが、昨今、就職活動の長期化・早期化がみられるなか、インターネットの普及によって、留学中も日本の就職戦線の状況や友人の就職活動の様子を知ることができる（できてしまう）ため、「就職のことが気になって、落ち着いて留學生活を送れない」という声も耳にする。留学期間中も長期休暇のたびに日本に帰り、就職活動をしていたという例もある。とはいえ、ここでの問題は、就職活動のせいで留学できない、というケースだが、むしろ、これは大学だけで解決できるものではない。

◇遡及進級 実は、個人的には、派遣留学の促進には必ずしも賛成ではない。むしろ

ん、自分の留学経験（スコットランドのグラスゴー大学）からも、留学というものがいかに人生において意義深いものであるかは承知しているが、他方、「大学というもののあり方」を考えると、疑問がないでもない。いうまでもなく、派遣留学においては多くの場合、留学中の取得単位が帰国後、進級・卒業に必要な単位に認定され、したがって、いわゆる遡及進級となり、留年することなく、4年制の学部なら4年間で卒業することができるような制度となっているが、僕の個人的な疑問はその点にある。1年間の留学なら4年プラス1年の計5年間で卒業、というなら問題はないが、慶應義塾なら慶應義塾が自信をもって提供しているはずの4年間のカリキュラム、そのうちの1年間に削って留学を勧める、ということにはそもそも疑問がある。

促進のための施策

国際センターの所長という立場からは天邪鬼的な如上の「派遣留学批判」はさておき、派遣留学の促進のためには多様な留学先の検討と種々の環境整備が考えられよう。

◇留学先の検討 派遣留学の志望にみられる最近の学生の傾向としては、自らインターネット等で入念な調査をおこない、留学の志望校を厳選の上、応募してくる学生が少なくないが、やはりいつの時代も「有名どころ」を選好する傾向があることは否定できず、この点はやはり問題といえよう。慶應義塾の交換留学の相手校には著名大学が多く、例えばアメリカであればアイヴィー・リーグに属するような大学が多くあり、学生の人気も高いが、今後はより広い視野をもって色々な大学との連携を考えてゆくべきだろう。

例えば最近では、EUのエラスムス・ムンドゥス計画によって、欧州の大学でも英語で学べるプログラムを提供しているところが増えている。また、歴史が浅く、一般的な知名度はさほど高くない大学のなかには、しかし、留学生の受け入れに熱心で、留学生のニーズに合ったプログラムや環境の整った寮を用意し、したがって、留学先としては好ましいところも少なくない。既に多くの著名大学と学生交換を実施している慶應義塾としては、留学を考える学生の裾野を拡げるためにも、こうした種々の大学との連携も視野に入れるべきだろう。また、昨今、アメリカに留学する学生の減少が問題視されているが、これについては、大規模な総合大学以外にも目を向け、特に大都市以外の地域にある質の高いリベラル・アーツ・カレッジ等との連携も検討に値しよう。

他方、今後は多国間プログラムも増えてゆくだろう。従来 of 留学制度はまずは二国間のものが一般的だったが、近年は前述のエラスムス・ムンドゥス計画に代表されるような多国間のものが擡頭をみている。そうしたなか、慶應義塾においては日・中・韓の三国間の連携プログラムがユニークなものとして注目されよう。

その一つは「延世・香港・慶應 三キャンパス合同東アジア研究プログラム」という名のプログラムである。「三キャンパス・プログラム」と略称されるこれは、三か国の三大学、すなわち延世大学、香港大学、慶應義塾大学の学生が1年間、一緒に三大学のキャンパスを移動しながら学ぶ、という斬新な留学プログラムで、慶應義塾が長年にわたって懇意にしている延世大学の熱心な誘いによって始められたものである。

ただし、各国の学年暦や各大学のカリキュラムの柔軟さ等にはかなりの違いがあるため、こうした特異なプログラムの実施は決して容易なことではない。事実、三キャンパス・プログラムについては、学年暦の相違に起因する問題によって一度は中止の決定にまでいたったが、それを惜しむ関係者の尽力によってどうにか復活を遂げた、という曲折がある。他方、こうした連携プログラムについて特に注目すべき意義の一つは、中国・韓国の学生の英語力の高さに触れることによる刺激、にあるといえよう。三キャンパス・プログラムは英語を使用言語としておこなわれるが、どの学生にとっても英語は母語ではない。しかし、中国・韓国の学生はすこぶる流暢に英語を操り、日本の学生はそれを目の当たりにして大いに刺激を受ける。

◇環境整備 前節で留学の主な障害の一つとして就職活動を挙げたが、就活問題と留学というと、在学期間延長制度、いわゆる卒業延期制度のことが思い浮かぶ。慶應義塾では某学部が20年以上も前から実施してきており、今般、全学的に導入することができるようになったこの制度は、要するに、4年間で卒業のところをもう1年間、というもので、ともすると、いわゆる就職留年を合法化する制度、ともみられようが、今般の導入の提案では、留学等に活用するための1年間、としてこれを捉えていることが注目される。

また、留学中の取得単位の認定方法は大学や学部によってさまざまだろうが、問題の一つは、どの学年の単位として認定するのか、すなわち、認定されるのは留学出発時の学年の単位としてだけなのか、それとも遡及進級後の学年の単位にも認定されるのか、という問題である。むろん、遡及進級のため、ということだけなら、留学出発時の学年の単位に認定すれば足りるが、学生としては、遡及進級後の学年の単位にも認定してもらえらるなら、なお嬉しい。慶應義塾では既にいくつもの学部で両学年の単位として認定している。

おわりに ― 志を高める教育

以上、一般的なことを書きつつも、実はジェンダー格差のことが気になって、あれこれ考えてきたが、そうすぐに何かをいえるはずもない。ただし、これまで相当数の留学志望者に接してきた経験からいえば、留学の目的、特に留学における英語の位置づけについて男女差があるように思う。男子学生の場合は、就職して社会人になった

ら必須の英語力、これを高めるのがまずは留学の目的、という意識が多く認められるが、女子学生の場合は、英語力も高めたいが、第一の目的は〇〇学のカリキュラムが充実している〇〇大学で学ぶこと、といった学生が少なくなく、ベタな言い方をすれば、男子よりも志が高い。さらにいえば、女子の留学志望者においては志が高く、しかも志が具体的な場合が少なくないが、男子学生においては一見、志が高そうでも、具体性に欠け、いわば夢に過ぎないことも少なくない。つい先日もゼミの学生、たまたま男女各1名からの留学の相談に乗ったが、色々な意味で雲泥の差だった。

志の問題はすぐにはどうにもならないだろうとはいえ、これは、留学の促進などといったことはさておいても、大学教育の質の問題でもある。まずは常日頃から彼らの志を高めることができるような教育をおこないたいものである。